沖縄県立埋蔵文化財センター
第 46 回文化講座「発掘調査速報 2011　その 1」

平成 23 年 7 月 23 日（土）13：30 ～ 16：15

あいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センター所長　　大城　慧

「沖縄県戦争遺跡詳細確認調査」　　山本正昭‥‥ 5
「基地内文化財分布調査」　　大堀皓平‥‥ 7
「海軍病院建設予定地内発掘調査　　新垣　力‥‥14
「白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査」片桐千亜紀‥‥18

質疑応答

沖縄県戦争遺跡詳細確認調査

当センター調査班主任　山本正昭

はじめに

今回、報告する沖縄県戦争遺跡詳細確認調査事業は、文化庁国庫補助事業により平成 22 年度から 26 年度までの 5 ヶ年計画で実施しているものである。主に沖縄県内に所在する戦争遺跡 979 箇所の中でとくに重要な戦争遺跡を選定し、将来的に国、県指定史跡への基礎資料として活用することを目的として事業が立ち上げられた。

沖縄県内には様々な戦争遺跡が分布しており、その種類は多岐に及ぶ。過去に実施した分布調査から、太平洋戦争および沖縄戦において構築、利用された人工壕や自然壕、塹壕、そして桟橋跡や砲台跡といった構築物、兵舎跡や監視所跡といった建造物、更に忠魂碑や奉安殿といった国威高揚の石碑の６つに類別し、その中でも地域的な特徴が現れ出ている戦争遺跡を調査対象として実地調査を行った。また外部から戦争遺跡の専門家を招聘し、調査委員会を立ち上げた。

昨年度は３回の調査委員会会議と沖縄本島中部８ヵ所、南部で９ヵ所、宮古島 16 ヵ所、石垣島 15 ヵ所、西表島で３ヵ所と計 51 ヵ所の戦争遺跡の現状把握を実施した（別表）。これら調査した戦争遺跡を以下、種類別に概観していく。

１．人工壕

沖縄県内に残る戦争遺跡の中で人工壕は最も多く確認されている遺跡である。主に旧日本軍が構築したものが多く、壕群を形成している事例が多く見られる。宮古島市の海軍第 313 設営隊の地下壕群やタキグスバルの地下壕群、石垣市の白保・与那原の壕、那覇市のらくだ山の陣地壕などの調査を実施した。人工壕の役割としては避難用や弾薬などの軍事物資格納、砲台設置など多岐に及んでおり、その形態や規模は様々である。石灰岩や砂岩などの岩盤を掘り込んだものもあれば、コンクリートにより補強がなされているものも見られ、それぞれ用途に応じて構築されている。一方で民間人の避難壕では石垣市の石垣氏宅の避難壕や竹富町の船浮集落の避難壕の調査を行ったが、何れも小規模でかつ、奥行きは 10m を越えないものが多く見られた。いずれも家族が避難するための壕であることから、内部は必要最小限の広さに止められている。

２．自然壕

主に住民避難壕として自然洞穴が利用されており、第四紀石灰岩地帯である沖縄本島中、南部と宮古諸島地域に多く分布している。本調査においては宮古南静園の避難壕が自然洞穴を利用した避難壕として取り上げることができる。宮古南静園の北側には石灰岩の崖が南北方法に形成されており、その崖面途中に自然洞穴がいくつか点在している。その中で最も規模の大きい自然洞穴を避難壕として設定し、そこで避難生活が展開された。当時に

おいては入り口を草木などで偽装し、内部は生活できるように石敷き床や炊事場などを構築していた。

３．構築物

構築物はトーチカや砲台跡、そして橋梁や道路、桟橋跡などの施設で、主に陣地や要塞の構成する施設の一部として機能する。本調査においては主にうるま市の伊計島の大砲陣地壕や平敷屋の砲台跡などの中城湾臨時要塞に伴う戦争遺跡や、竹富町の船浮集落の戦争遺跡群、北中城村の大城の銃眼、中城村の津覇之寺内のトーチカなどが対象となった。それらの多くは撤退時の破壊行為や戦後のスクラップ回収などにより保存状況が芳しくなく、基礎部分のみが残存している事例が多い。

４．建造物

兵舎や監視哨、指揮所などの建物で、そのほとんどが基礎部分のみが残されている程度であり、沖縄県内の戦争遺跡の中で最も残存状況が悪い。竹富町の船浮臨時要塞の兵舎跡や石垣市の平久保の海軍特設見張所跡は建物基礎枠やアンカー、階段、トイレ跡などが見られるのみであるが宮古島市の旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所跡はコンクリート上屋が良好に残存している。

５．碑

国威高揚のための記念碑や顕彰碑、忠魂碑、御真影を安置する奉安殿などがある。戦時中における地域の動向を知る上で重要な戦争遺跡と言える。本調査では石垣市登野城小学校の奉安殿、大浜小学校の忠魂碑、池間国民学校の奉安殿跡、ツヌジ御嶽の忠魂碑の調査をおこなった。

６．その他

上記の分類に当てはまらない戦争遺跡として弾痕が残る建造物があり、本調査では石垣市の崎枝の電信屋に残る弾痕、宮古島市の宮古南静園内に残る弾痕、うるま市の津堅の灯台跡の残る弾痕の調査を行った。これらは直接、戦争に関連した施設ではないが当時における戦闘や空襲の状況を知る上では重要な遺跡として捉えることができる。

【参考文献】

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001～2006「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅰ）～（Ⅵ）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第５、12、16、25、30、41 集

うるま市教育委員会 2010「うるま市の戦争関連遺跡と慰霊塔」『うるま市文化財調査報告書』第 12 集

	名称	所在地	種類	
1	梅村庭園	北海道二海郡八雲町	呉服商	
2	香雪園	北海道函館市	郷士	国
3	金平成園	青森県黒石市		
4	清藤氏書院庭園	青森県平川市		
5	瑞楽園	青森県弘前市	豪農	国
6	成美館	青森県平川市	郷士	国
7	揚亀園	青森県弘前市	実業家	−
8	池田市庭園	秋田県大仙市	豪農	
9	佐竹氏別邸	秋田県秋田市	大名庭園	国
10	酒井氏庭園	山形県鶴岡市	大名庭園	国
11	菅家庭園	山形県鶴岡市	武家庭園	−
12	齋藤氏庭園	宮城県石巻市		
13	南湖公園	福島県白河市	大名庭園	
14	御薬園	福島県会津若松市	大名庭園	
15	偕楽園	茨城県水戸市	大名庭園	
16	楽山荘	群馬県甘楽町	大名庭園	国
17	懐古園	長野県小諸市	大名庭園	
18	兼六園	石川県金沢市	大名庭園	
19	玉泉園	石川県金沢市	武家庭園	
20	楽寿園	静岡県三島市	宮家庭園	国
21	徳川園	愛知県名古屋市	大名庭園	
22	揚輝荘	愛知県名古屋市	呉服商	−
23	大倉公園	愛知県大府市		
24	六華園	三重県桑名市	実業家	国
25	諸戸氏庭園	三重県桑名市	実業家	国
26	清水園	新潟県新発田市	大名庭園	
27	貞観園	新潟県柏崎市	庄屋屋敷	国
28	柴田氏庭園	福井県敦賀市	豪農	
29	養浩館	福井県福井市	大名庭園	国
30	伊藤氏庭園	福井県南越前町		国
31	梅田氏庭園	福井県池田町		国
32	楽々園	滋賀県彦根市	大名庭園	国
33	玄宮園	滋賀県彦根市	大名庭園	国
34	養翠園	和歌山県和歌山市	大名庭園	
35	御山荘園	和歌山県海南市	実業家	
36	石谷家住宅	鳥取県八頭郡八頭町	庄屋屋敷	
37	仁風閣	鳥取県鳥取市	大名庭園	−
38	尾崎氏庭園	鳥取県湯梨浜町		
39	深田氏庭園	鳥取県米子市		
40	後楽園	岡山県岡山市	大名庭園	
41	東湖園	岡山県岡山市	大名庭園	
42	衆楽園	岡山市津山市	大名庭園	国
43	縮景園	広島県広島市	大名庭園	
44	吉水園	広島県山県郡安芸太田町		県
45	堀庭園	島根県津和野町	武家庭園	国
46	毛利氏庭園	山口県防府市	大名庭園	国
47	栗林公園	香川県高松市	大名庭園	国
48	中津万象園	香川県丸亀市	大名庭園	
49	天赦園	愛媛県宇和島市	大名庭園	
	楽水園	福岡県福岡市	実業家	
50	松涛園	福岡県柳川市	大名庭園	
51	魚楽園	福岡県柳川市		
52	旧戸島家住宅	福岡県柳川市	武家屋敷	国
	旧伊藤伝右衛門邸	福岡県飯塚市	実業家	

	大浦荘	福岡県飯塚市		
53	神野公園	佐賀県佐賀市	大名庭園	
54	旧久留島氏庭園	大分県玖珠町	大名庭園	県
55	水前寺成趣園	熊本県熊本市	大名庭園	
56	磯庭園	鹿児島県鹿児島市	大名庭園	
57	旧島津氏玉里邸庭園	鹿児島県鹿児島市		国

基地内文化財分布調査

当センター調査班　大堀 皓平

１　基地内文化財分布調査とは

基地内文化財分布調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内における埋蔵文化財（遺跡）の実態把握、遺跡分布地図等の文化財保護のための基礎資料作成を目的としている。平成９年度から文化庁の国庫補助事業によって実施され、平成 11 年度からは特に緊急性が高い普天間飛行場内の調査を行うようになった。平成 13 年度からは宜野湾市教育委員会も参加して普天間飛行場内を分担して調査を行うようになり、平成 20 年度に調査可能範囲における試掘調査をほぼ完了するに至った（宜野湾市は現在も継続中)。そして平成 21 年度にはそれまでの調査成果をまとめた『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告)』を刊行している。

一方で稼働中の基地であるため制約も多く、特に平成 21 年度からは立入手続きが難航するようになっている。さらに広大な面積と 100 を超える遺跡の調査・整理作業に対応するための調査体制の確保など、先に解決すべき課題も多く、まさに内憂外患の状況にある。このように成果と課題を抱えつつ、今年度で 14 年目を迎えている。

２　調査の方法

この事業で行っている調査手法は以下の通りである。この事業では遺跡分布地図に載せられる遺跡の分布や範囲を諮るため、調査箇所の正確な位置を把握しておくことが求められる。普天間飛行場の約 480.5ha という広大な範囲においてこれを行うため、あらかじめ飛行場とその周辺に対して３段階の地区割を設定し、調査箇所にこの地区割りと調査箇所の国土座標を記録することで位置情報を管理している。

（１）表面踏査

実際に現地を歩き、地表面を観察する。地表に露出する遺構・遺物の散布状況や地形等を確認することで遺跡（埋蔵文化財）の有無を把握する方法。安価で時間もかからないが遺跡の有無や内容を完全に把握することは難しい。

（２）試掘調査

遺跡の有無を確認するための部分的な発掘調査。普天間飛行場ではあらかじめ設定した地区割に基づき、30m メッシュの交点を発掘している。１箇所あたりの規模は 4m×4m で、原則として重機（バックホウ）を使用して慎重に掘削を行うが、重機を使用できない場所の場合は 2m×2m の範囲を人力により掘削する。

（３）確認調査

遺跡の範囲・性格・内容等を把握するための部分的な発掘調査。試掘調査によって確認された遺跡について、より詳細な範囲・性格・内容を調べて遺跡の評価を行うために試掘調査よりも広い面積を発掘する。普天間飛行場内では、あらかじめ設定した地区割にもとづいてトレンチ（溝）を設定し、遺構の広がりや土の堆積状況などを検討して遺跡の範囲や評価などを確定する。

３　大山加良当原（おおやまからろーばる）第四遺跡について

平成 19 年度に当センターの試掘調査によって認定された新発見の遺跡である(図1)。試掘調査によって、１層：表土層、２層：戦後の造成土層、３層：近世・近代の耕作土層、４層：縄文時代の層の４つの時期の土層が認められる。その中で縄文時代の層である黄褐色砂質～粘質シルト層は複数の地点で厚く堆積している状況が確認され、その中には縄文土器が僅かに含まれていた。堆積土の状態から、これらの縄文土器を含む土は、地山である赤土（マージ）が水等の影響によって谷もしくは窪んだ地形に流れ込んで再堆積したものと考えられる。このことは当時の環境や人間の土地利用を考える上で非常に重要である。

なお同様の堆積状況は、宜野湾市教育委員会が調査を行った上原濡原（うえはらぬーりばる）遺跡でも見られる(図1)。この遺跡からは縄文時代晩期相当期の畝間状遺構が検出されており、この時期における農耕（畑作）の可能性を示唆する重要な遺跡である(写真1)。従って大山加良当原第四遺跡においても、この縄文時代層から同様の性格の遺構が検出される可能性が挙げられる。

平成 20 年度は、この層のより詳細な情報を収集する目的で、試験的に小規模（6m×12m）なトレンチを 2 箇所設け、人力による確認調査を実施した。２箇所設定したトレンチのうち、1 箇所では近世・近代の時期と思われる耕作土と、溝状遺構が確認された。さらにグスク時代のものと思われる耕作土も確認できたが、明確な遺構や遺物は確認できなかった。その下から、目的とする黄褐色砂質～粘質シルト層が検出されたが、時間的な制約から一部分のみを 50 ㎝ほど掘り下げた時点で調査を終了した。この層から得られた縄文土器は３点の小片のみであった。翌 21 年度は立入手続き等の関係で開始が遅れたため、表面踏査と確認調査箇所の選定等を行うにとどめ、発掘作業は平成 22 年度以降に持ち越す事とした。

４　平成 22 年度の調査成果

平成 22 年度は、平成 20・21 年度に引き続き大山加良当原第四遺跡の確認調査を実施した(写真2)。しかし平成 21 年度と同様に立入手続き等の関係で開始が遅れたため、発掘作業は３トレンチのみを対象とした(図2)。調査期間は 2010（H22）年 12 月１日～2011（H23）年３月 29 日の約３ヶ月で、うち２ヶ月間は様々な事前調査を行ったことから、実際は２月の約１ヶ月間という短期の調査となった。

調査の結果、上記と同様の４枚の層が確認された。そのうち３層（近世・近代の耕作土層）のトレンチ東側からは、平行する溝状遺構が２条検出された。遺物は特筆すべき資料として同じく３層から青磁片が僅かに出土しているが、表土から３層までの主だった遺物は近代頃の沖縄産陶器だった。これらの特徴は、この地点が集落地ではなく田畑が群居する耕作地であった可能性を裏付けるものである。

一方、注目される黄褐色砂質～粘質シルト層はトレンチ周囲に設けたサブトレンチにおいて確認できたが、遺構・遺物とも得られなかった。しかしこの層はトレンチ内で検出される深度に違いがみられ、縄文時代当時は比較的上下のある地形であったことが理解される。

５　まとめ

平成 22 年度は期間等の問題によって調査を途上で終了せざるを得なかったが、近世・近代頃の溝状遺構が検出された。この成果は、グスク時代以降の大山加良当原第四遺跡が生産遺跡であることを裏付けるものとなった。一方で縄文時代については現状では遺構の有無等について言及することはできず、残り４箇所のトレンチの発掘調査とともに次年度の課題として持ち越された。

他方で事業全体では、平成 21 年度に引き続いての立入等手続きの遅れにより、調査規模は縮小を余儀なくされた。これは進捗が順調とはいえない当事業にとって深刻な打撃となった。日々変化する情勢に加え、調査体制の確保などの懸案事項も解決されておらず、基地内文化財分布調査は依然として厳しい状況が続いている。

注：宜野湾市教育委員会 1995『上原濡原遺跡発掘調査記録―普天間飛行場基地内陸軍送油管新設工事に係る緊急発掘調査―』宜野湾市文化財保護資料第 43 集

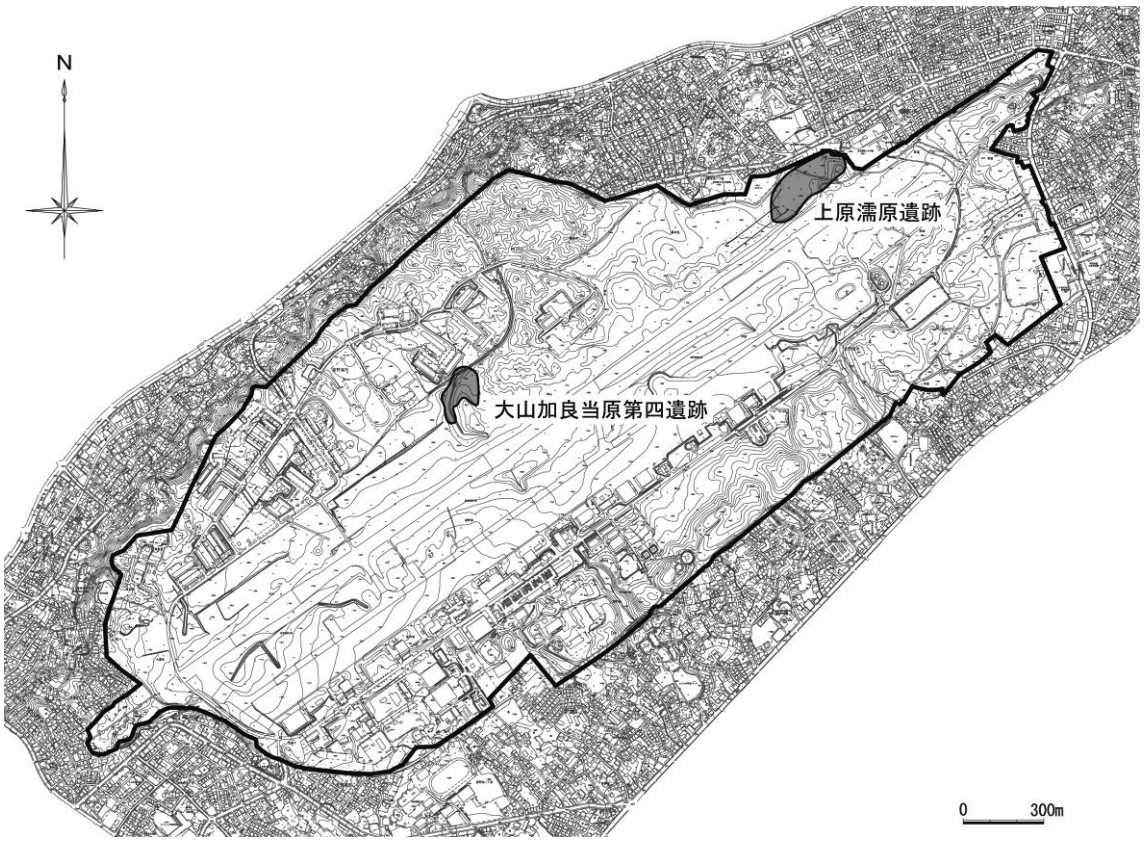

図１　大山加良当原第四遺跡と上原濡原遺跡の位置関係

写真１　上原濡原遺跡の畝間状遺構（宜野湾市教育委員会 1995 [注]）

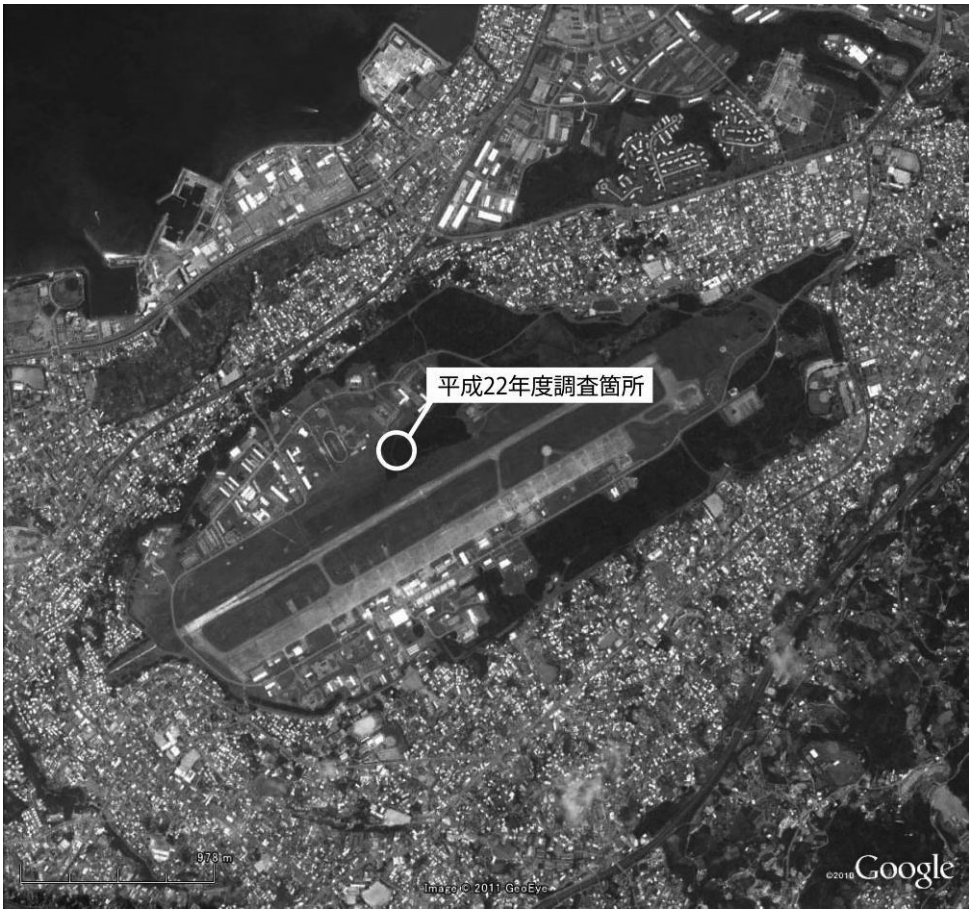

写真２　平成 22 年度事業実施箇所

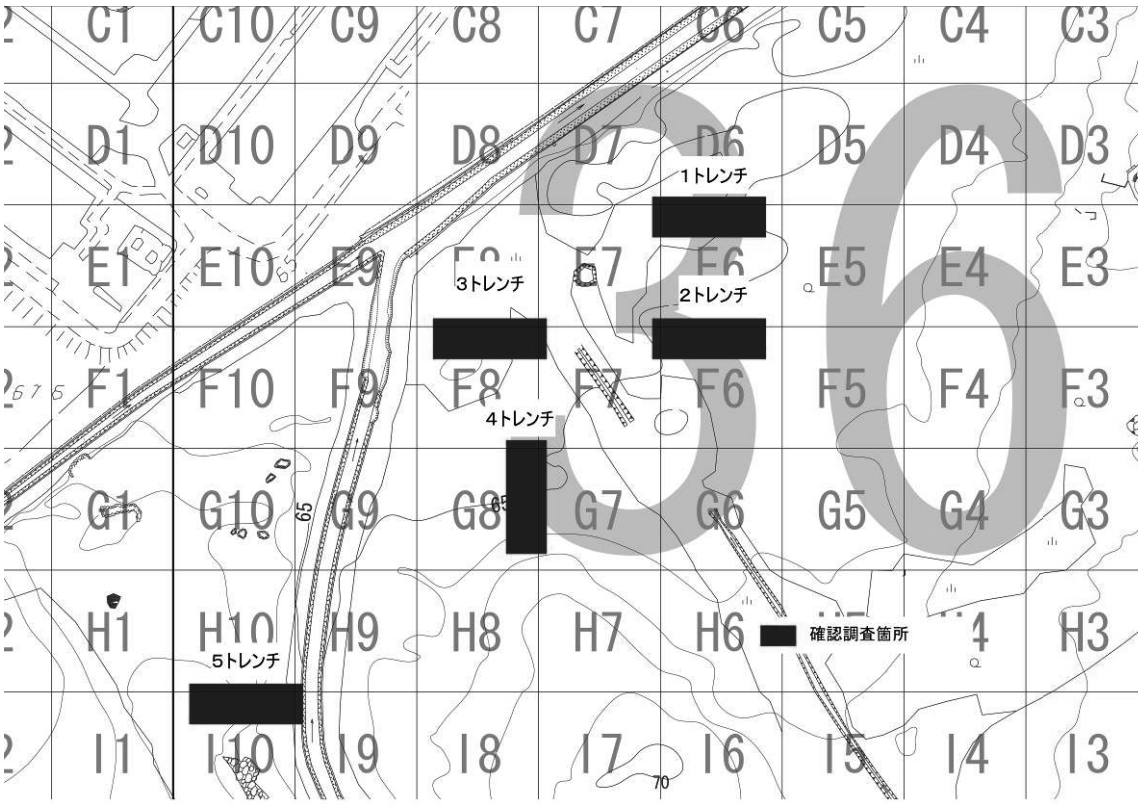

図２　平成 22 年度　トレンチ配置図

写真３　調査区遠景

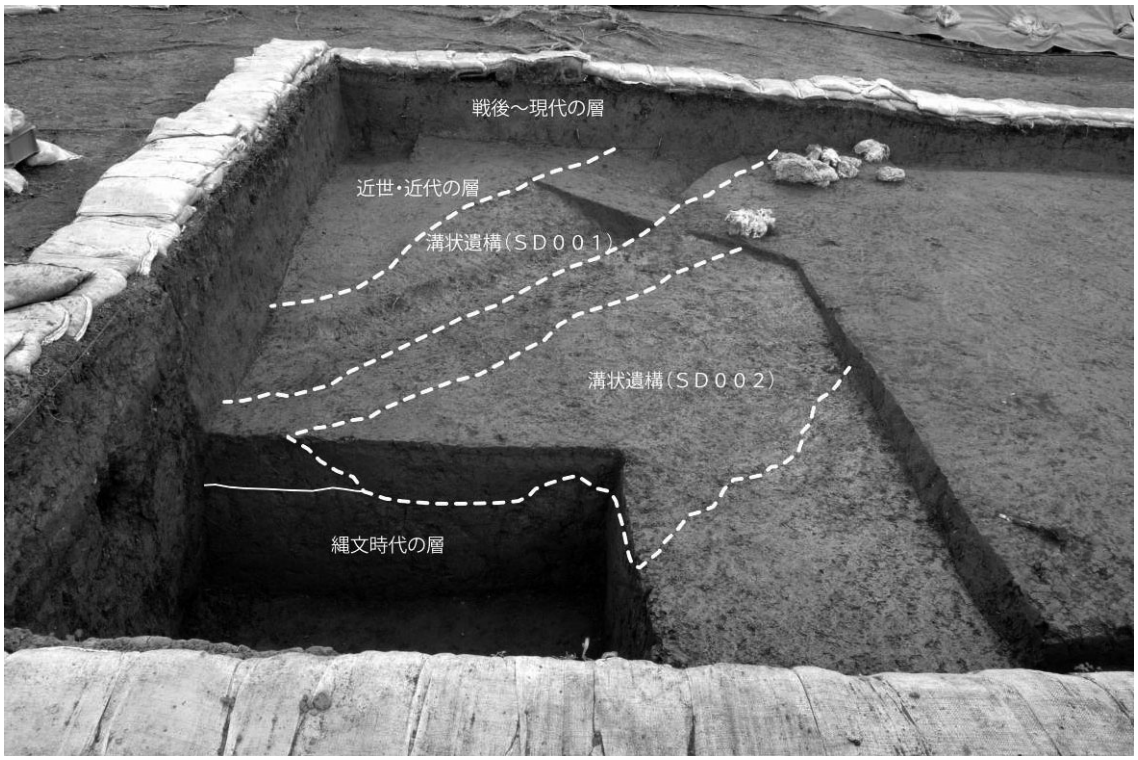

写真４　溝状遺構検出状況と層序関係

写真５　溝状遺構（SD001）断面

写真６　簪（ジーファー）出土状況

写真７　平成 22 年度完掘状況

海軍病院建設予定地内発掘調査（普天間古集落遺跡・普天間石川原遺跡）

当センター調査班　主任　新垣　力

1　調査期間：2010（平成 22）年 8 月 12 日～2011（平成 23）年 3 月 28 日

2　検出遺構
○近世～近代：溝跡、方形石組遺構、炉跡、井戸跡、ピット、土坑など
○グスク時代：ピット（建物跡含む）、土坑など
○縄 文 時 代：土坑など

3　出土遺物
○近世～近代：陶磁器類（沖縄産・中国産・本土産）、金属製品、ガラス製品など
○グスク時代：中国産陶磁器、カムィヤキ、土器など
○縄 文 時 代：石器、土器など

4　時代別の概要
○近世～近代：調査区の大半に遺物包含層が広がり、遺構は溝跡・土坑・ピットなどを確認。建物跡及びそれに関連する遺構が少ないため、一帯は主に耕作地または何らかの作業場として使用された可能性が高い。

○グスク時代：遺構はピット、土坑などがあり、建物跡と想定されるものもある。遺物は中国産陶磁器・土器などが出土するが、量的には最も少ない。

○縄 文 時 代：遺物包含層は一部で確認。遺構は土坑などが検出されており、遺物は石器・土器などが出土する。

調査箇所図

写真１　遺構完掘状況（Ⅵ地区）

写真２　遺構完掘・検出状況（Ⅶ地区）

写真３　方形石組遺構

写真４　方形土坑

写真５　炉跡完掘状況

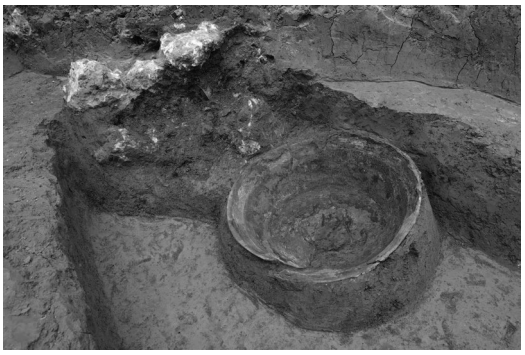

写真６　鉄鍋出土状況

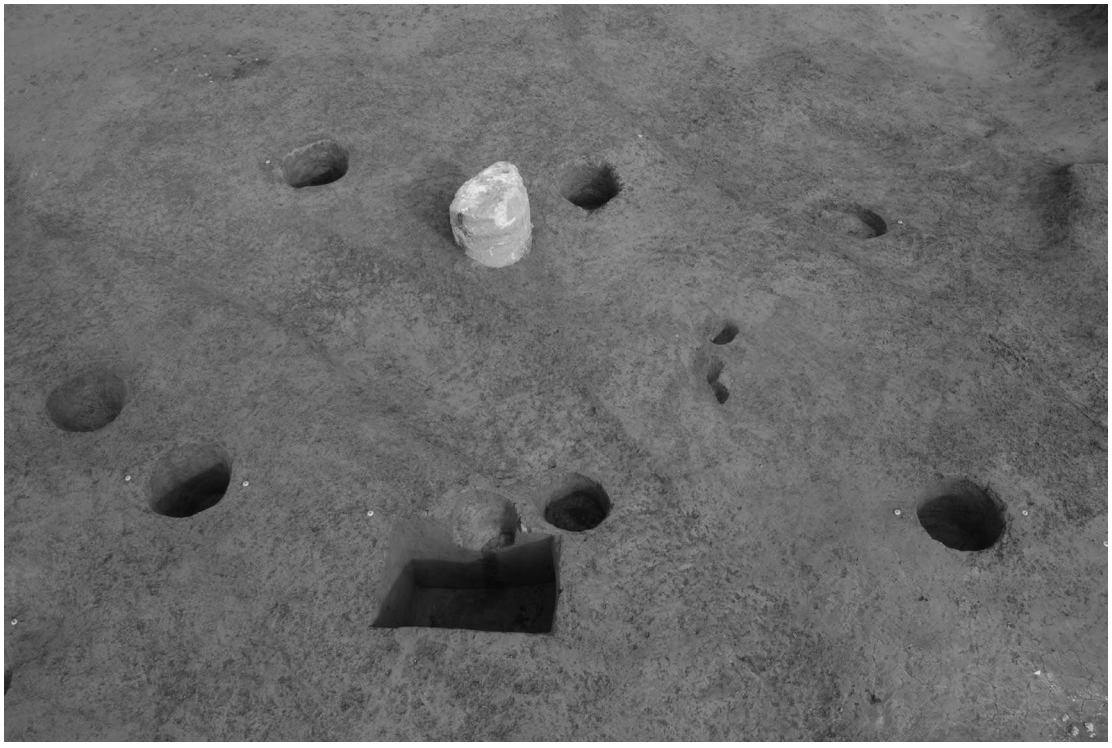

写真７　掘立柱建物跡検出状況１

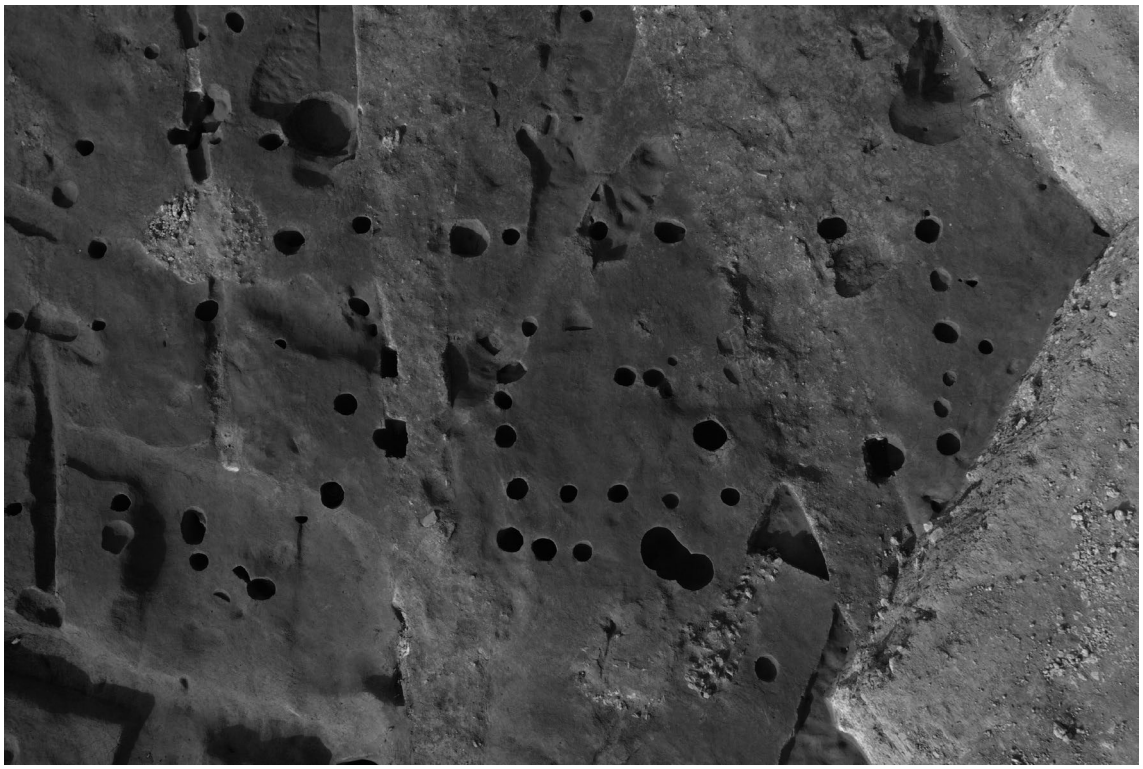

写真８　掘立柱建物跡検出状況２

写真９　土坑半截状況

白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査

沖縄県立博物館・美術館　学芸員　　片桐千亜紀

１．はじめに

白保竿根田原洞穴遺跡は、新石垣空港建設工事に伴って発見された洞穴遺跡です。本洞穴は、石垣市盛山東牛種子および白保竿根田原にまたがる長大な鍾乳洞であり、遺跡からは世界有数の珊瑚礁が発達した美しい太平洋を望むことができます。

遺跡を発見したのは、2007 年～2008 年に洞穴の測量調査を実施していた沖縄鍾乳洞協会の山内平三郎氏とそのチームです。彼らは、洞穴内から八重山諸島最古の文化遺物である下田原式土器（縄文後期相当）をはじめ、15 世紀頃の中国青磁、多数の人骨やイノシシ等脊椎動物遺体、貝類遺体といった多種多様、多時期にわたる資料を回収しました。

2009 年、化石ホールと呼ばれる地点の土壌から回収された人骨３点について放射性炭素年代測定を実施したところ、いずれも後期更新世に属することが明らかとなりました。測定値は頭骨 20,416BP（２号人骨：成人男性)、足指骨 18,752BP（４号人骨：成人)、腓骨 15,751BP（８号人骨：成人）でした（Nakagawa et al. 2010)。また、これら後期更新世に属する人骨の他にも、八重山諸島初の先史時代（無土器文化期）に属する 2,316BP（６号人骨）や 998BP（５号人骨）を示す人骨、近世後半の 175BP（１号人骨）を示す人骨も発見されました。

2010 年、沖縄県立埋蔵文化財センターでは沖縄県立博物館・美術館、石垣市教育委員会の協力を得て、白保竿根田原洞穴の発掘調査を実施しました。

今回は、その発掘調査概要を報告します。

２．調査期間

2009 年８月～11 月の４ヶ月間、白保竿根田原洞穴遺跡の緊急発掘調査を実施しました。本遺跡は新石垣空港建設によって洞穴自体が破壊される予定であったため、すべて記録保存の対象となっていましたが、遺跡の重要性が認識されたことによって、一部を除き保存されることとなりました。

発掘調査は化石ホール地点を中心とし、洞穴内部の分布調査も併せて実施しました。８月からの１ヶ月間を洞穴内部の調査にあて、９月から 11 月まで化石ホールの重点的な発掘調査を実施しました。

４．調査体制

調査にあたっては、考古学だけでなく、人類学、古生物学、地質学、洞穴学、地球科学の様々な分野の専門家と共同研究を行いました。また、調査を慎重に進めるため、９名の専門家からなる「白保竿根田原洞穴総合発掘調査委員会」を設置しました。

５．洞穴内部の調査

洞穴内の数カ所にトレンチを設定し、調査を実施しました。様々なトレンチで多時期にわたる多種多様な遺物を含む土壌が存在する事が確認されました。また、遺物は、化石ホール地点を中心として下流側に集中して確認される状況であり、化石ホール地点から上流側ではほとんど確認されませんでした。どうしてこのように様々な時期の遺物が存在するのか、疑問が残りましたが、その後に実施した化石ホール地点の発掘調査によって、その疑問の答えを見つけることができました。

化石ホール地点自体が、後期更新世の人骨を包含するだけでなく、八重山先史時代下田原期や無土器期、グスク時代等の遺物を包含する複合遺跡だったからです。このことから、洞穴内部に散布する遺物は、化石ホール地点を供給源としていると推定されました。

６．化石ホール地点の調査

本遺跡は後期更新世からグスク時代、近現代にいたるまでの多数の文化層が重複した、沖縄県では稀有な複合遺跡であることが明らかとなりました。

【遺跡と層序の概要】

Ｏ層：現代の造成土　空港建設工事以前のゴルフ場の造成土。近現代の陶磁器や人骨等。

Ⅰ層：グスク時代包含層　中森式土器（グスク時代相当）、中国産青磁、タイ産褐釉陶器が出土。

Ⅱ層：砂礫層　海砂や枝サンゴ等を含む無遺物層。先史時代の津波堆積物？

ⅢA 層：無土器文化期（弥生～平安時代相当）および下田原文化期（縄文後期相当）包含層　炭化物集中部、礫敷遺構、崖葬墓等の遺構を確認。下田原式土器、イノシシ牙製品、サメ歯製品等が出土。

ⅢB 層：イノシシ骨包含層（完新世初頭）　多量のイノシシ骨と少量の礫石器が出土。

ⅢC 層：人骨包含層（完新世初頭～最終氷期最盛期）　頭骨や大腿骨など保存良好な人骨が多数出土。解剖学的な位置関係を保っていない。

Ⅳ層：更新世人骨包含層（最終氷期最盛期）　解剖学的位置関係を保っていない。イノシシや小動物骨も見られる。

７．まとめ

発掘調査の結果、本遺跡が近現代・グスク時代から後期更新世にまで遡る可能性がある複合遺跡であることがわかりました。後期更新世人骨の発見のみに注目されがちですが、これまで資料がほとんどなかった、八重山先史時代下田原期と考えられる崖葬墓や人骨資料、無土器期と考えられる人骨資料が得られた点も重要です。また、下田原期や無土器期の遺跡立地が洞穴にもあることが確認された点も注目されます。

無土器文化期から下田原文化期に属すると推定されるⅢA 層よりも下位の層（ⅢB 層・ⅢC 層・

Ⅳ層）からは、土器が確認されませんでした。ⅢB 層は食糧残滓と考えられる多量のイノシシ骨が確認されており、生活空間や作業空間に関係する洞穴利用の可能性があります。また、ⅢC 層は人工遺物が現段階で未確認ですが、多量の人骨が確認されており、墓等の可能性について検討しています。Ⅳ層は、後期更新世の年代値が得られた人骨が回収された、化石ホールの包含層に対応する層と考えられることがわかりましたが、調査面積が少ないためその性格を推定することは困難です。

本遺跡は洞穴遺跡であるため、有機質遺物の保存が良く、過去の人類の姿と動物相まで解明できる可能性がある点でも、本遺跡は極めて重要な意義を有します。

今回の発掘調査は、遺跡壁面の保護を目的とした勾配造成のための範囲に限られたため、下層になるほど調査面積は狭くなっており、最下部のⅣ層を調査できた範囲は 6 ㎡程度に過ぎず、包含層の大半は保存されています。ⅢA 層より下位の層については未知の部分が多く、今後慎重な分析、検討を経た上で報告する予定です。

【引用・参考文献】

片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2011「更新世人骨の発見－沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡」『季刊　考古学』第 114 号　（株）雄山閣

片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2011「白保竿根田原洞穴遺跡」『南島考古だより』沖縄考古学会

山崎真治・片桐千亜紀・米田穣 2010「展望　白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査と沖縄における更新世人類研究の現段階」『考古学研究』第 57 巻　第 3 号（通巻 227 号）考古学研究会

山崎真治・片桐千亜紀・藤田祐樹・土肥直美・米田穣 2011「日本における更新成人骨研究の現状と課題－沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査から－」『ニュースレター第 17 号』日本旧石器学会

Nakagawa, R., N. Doi, Y. Nishioka, S. Nunami, H. Yamauchi, M. Fujita, S. Yamazaki, M. Yamamoto, C. Katagiri, H. Mukai, H. Matsuzaki, T. Gakuhari, M. Takigami, and M. Yoneda* (2010). The Pleistocene human remains from Shiraho-Saonetabaru Cave on Ishigaki Island, Okinawa, Japan, and their radiocarbon dating. *Anthroplogical Science,118（3）:173-183.*